
 学 会 記 事

第 15 回新潟 GHP 研究会

日 時 平成 25 年 2 月 23 日 (土)

午後 3 時 30 分～

会 場 ANA クラウンプラザホテル新潟

I. 一 般 演 題

 1 Wilson 病に対する生体肝移植施行 8 年後に
 精神病症状が出現し、胃潰瘍による出血性シ
 ョックを契機に意欲低下や動作緩慢が出現し
 た 1 例

 大竹 将貴・鈴木雄太郎・菊地 佑
 須貝 拓朗・大矢 洋*・堅田 慎一**
 染矢 俊幸

 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 精神医学分野
 新潟大学医歯学総合病院第一外科*
 同 神経内科**

Wilson 病の精神症状には知能低下や抑うつに
 加え、幻聴、妄想などの統合失調症様の症状が出
 現することが知られている。我々は、Wilson 病に
 対して家族性アミロイドポリニューロパチー
 (FAP) 患者の肝臓を用いたドミノ肝移植を施行
 し、その 8 年後に精神病症状が出現し、出血性シ
 ョック後に急激に進行した 46 歳男性の症例を経
 験した。

症例は X-10 年に Wilson 病と診断され、X-9
 年に FAP 肝を用いた生体肝移植を施行された。
 その後、X-5 年より様々な心気症状が出現し、し
 ばしば抑うつ症状も出現した。X-2 年に発熱を
 契機に興奮や言動の解体が出現したが、解熱後に
 消失した。X-1 年に「父の声が聞こえる」等の
 幻聴が出現した。X 年 6 月、胃潰瘍による出血性
 ショックを呈し、当院へ緊急入院した。加療によ

り全身状態は改善したが、7 月中旬より言動の解
 体が発生し 8 月 6 日に当科へ医療保護入院した。
 入院時、意識は清明だが、表情平板化や幻視、幻
 聴、被害妄想に加え、四肢の軽度筋強剛を認め、
 特定不能の精神病性障害の診断で、aripiprazole
 を最大 24mg まで投与したが改善は認められな
 かった。その後、risperidone 最大 6mg へ置換した
 ところ、幻視や幻聴、被害妄想は徐々に改善した
 が、意欲低下や動作緩慢、自閉傾向が顕著となり、
 転院加療のため X+1 年 1 月に退院した。

【考察】本症例は抑うつ、意欲低下、心気症状、
 幻視、幻聴、被害妄想を呈しているが、これらは
 Wilson 病の精神症状として矛盾はなく、出血性
 ショックを契機に Wilson 病による精神症状が増
 悪した可能性が最も考えられる。しかし意欲低下
 や動作緩慢、自閉傾向の急速な出現、また X-2
 年の発熱を伴う興奮や言動の解体は、抗 NMDA
 受容体脳炎を含めた自己免疫性脳炎などによる
 脳器質的疾患を疑わせる。今後、可能であれば自
 己抗体測定などの検査を進め、診断を深めていき
 たい。

 2 抗 NMDA 受容体脳炎後の情動不安定、被刺
 激性亢進に高用量クエチアピンが有効であっ
 たと考えられる 1 症例

 菊地 佑・鈴木雄太郎・大竹 将貴
 福井 直樹・大塚 道人・石原 智彦*
 染矢 俊幸

 新潟大学医歯学総合病院精神科
 新潟大学脳研究所神経内科*

抗 N-methyl-D-aspartate (NMDA) 受容体
 脳炎はグルタミン酸受容体の一つである NMDA
 受容体の NR1/NR2 ヘテロマーに対する抗体を介
 して発症する主として卵巣腫瘍に伴う自己免疫
 性の辺縁系脳炎であり、若年女性に好発し、初期
 に統合失調症様症状を呈するため、精神科領域で
 も注目されている。腫瘍摘出、免疫療法等の治療
 により比較的良好な予後を辿るとされているが、
 日常生活上、後遺症を残す例も少なくはない。今

回、卵巣腫瘍摘出後、長期間にわたり情動不安定、被刺激性亢進を認めたが、高用量の quetiapine により改善した抗 NMDA 受容体脳炎の 1 例を経験したので報告する。症例は 21 歳女性、元来明るく社交的な性格であった。発熱、頭痛、呂律不良、けいれん発作で発症し、市中病院内科でウイルス性髄膜炎の診断で加療された。髄液所見改善後も幻視、疎通不良を認め、精神科を受診したが、昏睡、発熱、けいれん発作、呼吸状態増悪を認め、神経内科入院となった。骨盤部 CT で両側卵巣奇形腫、および抗 NMDA 受容体陽性で、抗 NMDA 受容体脳炎と診断され、卵巣囊腫核出術が施行された。術後、呼吸状態、髄液、脳波所見は改善したが、興奮し、チューブ類を頻回に自己抜去していた。左卵巣奇形腫遺残の影響を疑われ、再び卵巣囊腫核出術が施行された。術後、単純な会話は可能となったが、記憶力低下、常同言語、表情平板化、被刺激性亢進を認め、医療スタッフらへの暴力もみられ、精神科病棟に入院した。自然経過に従い認知機能等は徐々に改善したが、被刺激性亢進は改善傾向を認めたものの残存した。鎮静目的に、家族の同意を得て quetiapine 900mg まで増量したところ経過中に体重増加、HDL コレステロール低下、QT 時間の延長を認めたものの、重大な副作用はなく、また過鎮静となることもなく情動不安定、被刺激性亢進の改善を認め、一般病棟へ転棟した。副作用の出現に注意しつつ、高用量 quetiapine を用いることは抗 NMDA 受容体脳炎による情動不安定、被刺激性亢進に有効かもしれない。

3 被災自治体職員の疲労と認知課題中の脳血流変化の関連：近赤外線スペクトロスコピーを用いて

橘 輝*・北村 秀明***・新藤 雅延*
本間 寛子***・染矢俊幸****

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*
新潟大学災害・復興科学研究所
災害医療分野**
新潟県精神保健福祉協会
こころのケアセンター***

【はじめに】2011年、新潟県T市役所職員は震災や水害のため過重労働を余儀なくされた。我々は同年12月に職員の労働ストレスと個人側の要因との関連について調査を実施し、実際の労働負担に加えてパーソナリティ特性と精神的レジリエンスが、労働ストレスの自覚に有意な影響を与えることを昨年の本研究会で報告した。今回我々は縦断的に労働ストレスの調査を行うとともに、認知タスクを課した際の近赤外線スペクトロスコピー (Near-Infrared Spectroscopy : NIRS) を実施した。

【対象】初回調査時に労働ストレスの強かった62名(男/女：51/11, 平均年齢38.1±9.5歳)を対象に2012年2月に同じ質問紙調査を再度行い、うち同意が得られた16名(男/女：14/2, 平均年齢39.7±10.2歳)にNIRSを実施した。

【方法】対象者は、疲労の自覚と勤務の状況を問う「労働者の疲労蓄積度自己診断チェックリスト(厚生労働省)」に回答した。更に16チャンネルのWOT-100(日立製作所)を用い、語流暢課題とRaven色彩マトリクス課題実施中の前頭部酸素化ヘモグロビン濃度(Δ [Oxy-Hb])を測定した。統計は重回帰分析、t検定、Welchの検定を用い、有意水準を5%とした。

【結果】対象者62名の再調査時の自覚的疲労得点を従属変数、年齢、性別、所属課、再調査時の勤務状況得点および初回実施した個人側の要因を独立変数とした重回帰分析を行ったところ、2回目の勤務状況得点(標準回帰係数(B)=0.507, $p < 0.001$)と初回の5因子性格検査の情緒安定